

## 創刊の辞

亀谷和史

日本福祉大学 子ども発達学部長

子ども発達学部開設（2008年4月）にともに、ここに新たな学部としての研究紀要『子ども発達学論集』を発刊することとなった。

子ども発達学部は、子ども発達学科（保育専修・初等教育専修）（150名）と心理臨床学科（115名）の2学科構成の学部である。子ども発達学科では、保育者（保育士・幼稚園教諭）・小学校教諭の養成課程を、心理臨床学科では中学校教諭（社会科）、高等学校教諭（公民科）の教職課程を新たに設置した。さらに、これらの免許状を基礎免許状として、学部として特別支援学校教諭の養成に取り組む。また心理臨床学科は、臨床心理士をめざす基礎学部としての心理学の専門教育だけでなく、それと教職教育（特に障害児教育）との2つの統合的教育をめざす学科となった。

このような2学科の構成をふまえるならば、当面の子ども発達学部の研究課題は、学部教育と連動しつつ、以下の3つが指摘できよう。

第1に、「幼保一体化」の展開や特別支援学校への改正、新たな教員養成政策の展開の中で、保育者・教員養成系学部としての教育学研究、教育内容研究・実践研究である。第2に、本学の「発達・教育・心理」系学部として、子どもを対象とした学際的研究の推進である。子ども学は、以前から提唱されてきたが、今なお発展途上である。発達教育学、臨床教育学なども同様であろう。これまでの教育学、発達心理学・臨床心理学を基礎とした学際的・総合的な子ども学、子ども発達学が追究・提唱されなければならない。この課題と重なるが、第3に、新たな子ども学、子ども発達学は、子ども家庭福祉や児童福祉の学門領域とも連携し、新たな子ども教育福祉の学としても追究されなければならない。それは、人生の前半期を見通した新たな政策科学も含まれる課題であろう。

すでに、1989年に国連「子どもの権利条約」が締結されて20年になる。国際的には、子どもの権利の実質的な保障が進展し、多くの先進国で、乳幼児からの手厚い教育の充実が、長期的・将来的にはその国の「人的資源」の質的向上、すなわち社会経済的発展に「貢献」することが理解され、認知されてきている。しかしながら、日本は、いじめ、不登校、校内暴力などの教育問題が恒常的に続き、「学力」低下が叫ばれるなかで「過度の競争」が当然視される社会風潮にある。のみならず、さらに、この10数年間の新自由主義的な政策の推進と、アメリカ金融危機に端を発する世界同時不況の影響で、格差社会と貧困がますます拡大し、生きづらい社会となってしまっている。

このような時代状況の中で、未来社会を展望できる新たな子ども学、子ども発達学の構築に向けて、今後、本論集が役立つことを願ってやまない。

最後に、アラゴンの著名な詩の一節を引用し、本論集の指針としたい。

教えるとは希望を語ること 学ぶとは誠実を胸に刻むこと  
かれらはなおも苦難のなかで その大学をふたたび開いた  
フランスのまんなかクレルモンに... (大島博光訳)

(「ストラスブール大学の歌」1942年 ルイ・アラゴン、フランスの詩人、1897 - 1982)